

1

大学教育におけるジェネリック・スキル

第1部では、大学教育の質保証という観点から重視されるようになってきた、ジェネリック・スキルの概念とその背景について説明します。その上で、愛知教育大学の学生にジェネリック・スキルを涵養する際の軸となる三つの力を提示します。

1-1. ジェネリック・スキル（汎用的技能）とは何か

昨今、大学教育の質保証という観点から、大学教育において何を教えるのではなく、何ができるようになるか、すなわち学生の学習成果に焦点をあてた教育内容や教育方法の検討・改善が行われるようになってきています。その中で、アカデミックな世界だけでなく、日常生活、社会生活を送る上でも必要とされる汎用性のある技能としての「ジェネリック・スキル（generic skills）」の養成が大学教育における課題とされるようになってきています。

産業界や教育界からも、学問の場である大学でこうしたスキルを身につけた学生を育てて欲しいという要求が高まっています。21世紀の知識基盤社会においては、特定の専門領域に限定された知識だけでなく、広範な知識・情報に積極的かつ柔軟に対応していくことのできるスキルが求められていると言えます。こうした背景に伴って、大学教育の質保証としての学生の学習成果—学生が汎用性のある力を身につけた上で卒業しているのか—が問われるようになってきているのです。

大学生がジェネリック・スキルを身につけるためには、一つの授業の中でどのような教育方法を行うかというミクロな視点と共に、学士課程のカリキュラムにおいて、どのような教育内容と教育方法で学生を導いていくかというマクロの視点が不可欠となります。しかし、ジェネリック・スキルには一つの決まった定義があるわけではありません。そのため、大学として、学生のジェネリック・スキルを涵養するカリキュラムを検討する場合には、まず「ジェネリック・スキル」の定義を大学として定めておく必要があります。昨今、各大学機関では、「ジェネリック・スキル」の定義・中身を明確にした上で、学士課程においてこれを涵養するカリキュラムを実施したり、教育方法の開発に向けた取り組みを行うようになってきています。

第1部の1節では、まず、「ジェネリック・スキル」という概念の一般的な意味と、この概念が大学教育において導入されるようになってきた背景について説明します。

「ジェネリック・スキル」概念導入の背景

〈社会的動向〉

経済産業省は、産業界から大学生に求められる力として「社会人基礎力」

(2006)を提起しています。「社会人基礎力」を「職業や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義し、3つの能力と12の能力要素を提示しています（図1）。3つの能力としては、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という項目を立て、それぞれの力の要素を示しています。

能力	能力要素		
前に踏み出す力	主体性	働きかけ力	実行力
考え抜く力	課題発見力	計画力	創造力
チームで働く力	発信力	傾聴力	柔軟性
	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力

(図1 3つの能力と12の能力要素)

こうした能力は、企業や若者を取り巻く変化を背景として、「基礎学力」「専門知識」を上手に活用していくために必要な能力と捉えられています。経済産業省では、「社会人基礎力グランプリ」を開催し、各大学における授業での顕著な取り組みを表彰するだけでなく、「体系的な社会人基礎力育成・評価システム開発・実証事業」を展開し、「社会人基礎力」を大学生に身につけさせるための、大学機関としての組織的な取り組みを推進しています。

経済産業省「社会人基礎力」URL:

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>

〈大学教育改革における動向〉

2008年の中央教育審議会による答申、「学士課程の構築に向けて」において、ジェネリック・スキルは「汎用的技能」と表現され、「知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能」として明確に定義されています。この汎用的技能としては、「コミュニケーションスキル」「数量的スキル」「情報リテラシー」「論理的思考力」「問題解決力」の5つが挙げられています。

コミュニケーションスキル ⇒ 日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。

数量的スキル ⇒ 自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。

情報リテラシー⇒情報通信技術（ICT）を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。

論理的思考力⇒情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。

問題解決力⇒問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。

中教審の答申においては、各大学での学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）策定を推進するという趣旨で、学士課程で育成する21世紀型市民の持つべき能力の内容（日本の大学が授与する学士が保証する能力の内容）に関する国としての参考指針を示しています。そのなかには、汎用的技能の他に、「知識・理解」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」が含まれています。

〈海外の動向〉

海外において、ジェネリック・スキルは、米国では「Basic skills」、英国では「Core skills」、豪州では「Key competencies」と呼ばれているように様々で、同じ国においても複数の名称で表されています（図2）。

イギリス	Core skills, key skills, common skills
ニュージーランド	Essential skills
オーストラリア	Key competencies, employability skills, generic skills
カナダ	Employability skills
アメリカ	Basic skills, necessary skills, workplace know-how
シンガポール	Critical enabling skills
フランス	Transferable skills
ドイツ	Key qualifications
スイス	Trans-disciplinary goals
デンマーク	Process independent qualifications

（図2 各国において「ジェネリック・スキル」を表現する用語）

出典：Australian National Training Authority (2003), *Defining Generic Skills: At a Glance*. National Centre for Vocational Education Research.p.2

海外の各国では、知識基盤社会において、グローバルな競争力をもった人材

を育成するという視点から教育改革が実施されてきています。職業教育との関連でジェネリック・スキルが重視されるようになり、職場における雇用者が、被雇用者に対して専門的なスキルに加えて、ジェネリック・スキルを求めたり、また個人が対人関係を築き、コミュニティを形成して行く上でもこうしたスキルが必要であると認識されるようになっていきます。様々な仕事や人生への適用が可能なジェネリック・スキルは、必要不可欠なものとして重視されるようになっていきます。特に、雇用という観点から言及される場合には、「雇用されうるスキル（エンプロイヤビリティ） employability skills」と呼ばれています。

ジェネリック・スキルの要素

ジェネリック・スキルを身につけた人というのは、具体的にどのようなことができる人のことでしょうか。Australian National Training Authority (2003) では、ジェネリック・スキルの共通要素をまとめています（図3）。

Basic/fundamental skills	literacy, using numbers, using technology
People-related skills	communication, interpersonal, teamwork, customer-service skills
Conceptual/thinking skills	collecting and organising information, problem-solving, planning and organising, learning-to-learn skills, thinking innovatively and creatively, systems thinking
Personal skills and attributes	being responsible, resourceful, flexible, able to manage own time, having self-esteem
Skills related to the business world	innovation skills, enterprise skills
Skills related to the community	civic or citizenship knowledge and skills

（図3 さまざまなジェネリック・スキルのリストの共通要素）

出典：Australian National Training Authority (2003), *Defining Generic Skills: At a Glance*. National Centre for Vocational Education Research.p.8

図3においては、読み書き、計算、パソコン等を使用するなどの基礎的なスキル、コミュニケーション、チームワークなどの対人的なスキル、情報を集め構成したり、問題解決を行うなどの思考スキル、責任感、柔軟性がある、タイムマネー

ジメントができるなどの個人としてのスキルと属性、イノベーションなどのビジネス界に関連するスキル、市民としての知識やスキルなどコミュニティに関連するスキルの6つが挙げられています。

まとめ

以上で確認したように、ジェネリック・スキルは、職場や地域社会の中で多様な人々と生活していくために必要なスキルであり、大学の中だけで通用するアカデミックな能力のみを指すわけではありません。大学生は、大学の中で学び培った力を、社会や職業生活の中で汎用的に活用することを期待されるようになっていきます。大学機関においては、自大学の理念に基づいて、学生が身につけるべき力を特定した上で、カリキュラムを構築し授業を展開し、その成果を測定し見直しを図るという取り組みも実施されるようになってきています。

各授業においては、もちろん科目の内容に応じた授業目標があり、特定の科目を除いて、スキルの修得そのものは授業目標にはなりません。しかし、授業の中での学生の役割が、知識の単なる受け取り手でないならば、それぞれの科目では知識の伝授と共に学生の何らかの力を涵養しているはずで、とはいえ、学士課程教育を通して、学生が汎用的なスキルを身につけることが望ましいのだとするならば、学生がどのような科目を選択したとしてもジェネリック・スキルが育めるようなカリキュラムを提供することが大学組織に求められるでしょう。

参考資料

- 濱名篤（2010）『学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究』平成19-21年度科学研究費補助金基盤研究（B）課題番号19330190 成果報告書（研究代表者 濱名篤）。
- 飯吉弘子（2008）『戦後日本産業界の大学教育要求—経済団体の教育言説と現代の教養論』東信堂。
- 川嶋太津夫（2008）「ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆」『名古屋高等教育研究』第8号、pp.173-191。
- 小島佐恵子（2007）「初年次教育の意義と可能性(2) 初年次教育とジェネリックスキル」『IDE』487、pp.64-69。
- 杉原真晃（2010）「第3章〈新しい能力〉と教養—高等教育の質保証の中で」、松下佳代編著（2010）『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房。
- 中央教育審議会（2008）「学士課程教育の構築に向けて（答申）」。

吉原恵子 (2007) 「大学教育とジェネリックスキルの獲得—ジェネリックスキルをめぐる各国の動向と課題」『兵庫大学論集』12、pp.163-178。

Australian National Training Authority (2003) *Defining Generic Skills: At a Glance*. National Centre for Vocational Education Research Ltd.

1-2. 愛教大生が修得すべきジェネリック・スキル

愛知教育大学は、教育学部のみからなる単科大学であり、教員を養成する「教員養成課程」と教員免許取得を卒業要件としない「現代学芸課程」により構成されています。いずれの課程においても学生の学びの基礎を形づくるのは共通教育科目であり、両課程に共通する教養教育のカリキュラムを充実させることで、「教員養成を軸に教養教育を重視する大学」を目指しています。

愛知教育大学の大学憲章には、「平和で豊かな世界の実現に寄与しうる人間の教育をめざし」、「学部教育においては教養教育を重視し、教員養成諸課程では多様な教員養成プログラムを通して、平和な未来を築く子どもたちの教育を担う優れた教員の養成をめざし、学芸諸課程では、社会の発展と文化の継承及び創造に貢献できる広い教養と深い専門的能力を持った多様な社会人の育成をめざす」ということが教育目標として掲げられています。こうした教育によって育まれた学生たちは、半数以上が教職に就いている他、企業、官公庁に就職したり、大学院へと進学しています。

教員養成系大学である愛知教育大学の授業において、学生はどのような力を身につけることを社会から期待されているのでしょうか。あるいは、学生はどのような力を身につけて社会に出ているのでしょうか。教員を目指す学生に求められる具体的な資質について、中央教育審議会等の答申は次のように示しています。

教員に特に求められる資質を、1997年の教育職員養成審議会の第一次答申等は、次のように示しています。

① いつの時代にも求められる資質能力

教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、これらを基盤とした実践的指導力等

② 今後特に求められる資質能力

地球的視野に立って行動するための資質能力（地球、国家、人間等に関する適切な理解、豊かな人間性、国際社会で必要とされる基本的資質

能力)、変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力(課題探求能力等に関わるもの、人間関係に関わるもの、社会の変化に適応するための知識及び技術)、教員の職務から必然的に求められる資質能力(幼児・児童・生徒や教育の在り方に関する適切な理解、教職に対する愛着、誇り、一体感、教科指導、生徒指導等のための知識、技能及び態度)

③ 得意分野を持つ個性豊かな教員

画一的な教員像を求めることは避け、生涯にわたり資質能力の向上を図るという前提に立って、全教員に共通に求められる基礎的・基本的な資質能力を確保するとともに、積極的に各人の得意分野づくりや個性の伸長を図ることが大切であること

さらに、2005年中央教育審議会の答申「新しい時代の義務教育を創造する」においては、優れた教師の条件について、以下の3つの要素が重視されています。

① 教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感など

② 教育の専門家としての確かな力量

子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業づくりの力、教材解釈の力など

③ 総合的な人間力

豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質、教職員全体と同僚として協力していくこと

2006年の中央教育審議会の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」は、1997年の教育職員養成審議会の第一次答申、2005年の答申の基本的考え方を踏襲していますが、教員には、不断に最新の専門的知識や指導技術等を身につけていくことが重要であり、特に「学びの精神」が強く求められることが付言されています。

現場の教育実践ですぐに役立つスキルを身につけることが、たとえ現場で必要とされているとしても、大学の教養教育課程は、それを学ぶ場としては適切で

はないように思われます。教育現場で教員として学びながら育んでいく力と、大学の教養教育を軸に4年間で育んでいくべき力と、専門課程で特に育まれる力を区別する必要があります。これらの三つのうちで、大学の教養教育を軸とする4年間で、教員を目指す学生に育むべきスキルとはどのようなものでしょうか。もちろん、愛知教育大学には、教員を目指さない学生もいますが、教員を目指す学生にとって必要な資質は、企業や官公庁等への就職を目指す学生にとっても重要であると言えます。

愛教大生に育むべき三つの力

本書では、愛教大生の育むべき力の軸となりうるものとして、次の三つを提示します。

- 背景の異なる人と対話する力
- 問題を発見し、解決へと導く力
- 複眼的に状況を理解し、思考内容を論理的に表現する力

一つ目の背景の異なる人と対話する能力は、豊かな人間性を備えていることはもちろん、社会性や幅広い教養がなければなりません。また、自分の立場に固執し過ぎない柔軟性を備えていることも不可欠です。

二つ目の問題を発見し、解決へと導く力は、課題を自発的に見出す能動性や、解決へと導く思考力・判断力・行動力を備えていることを必要とします。また、チームとして問題を解決するための協同性を備えていることも不可欠です。

三つ目の複眼的に状況を理解し、思考内容を論理的に表現する力は、複数の多様な情報源から適切なものを取捨選択し、自分の主張を形成することができる能力を備えていることが必要とされます。また、論理的に話す、書くというスキルを身につけていることも不可欠です。

これら三つの力は、いわば例示であり、よりよい定義へと向けた全学的な議論を必要とするものです。本学のいくつかの授業においても、この三つの力を含む、多様な力が教員の創意によって学生のうちに育まれています。次の第2部では、各授業担当の教員が学生に身につけさせたい力を、教育目標に沿った形で、具体的にどのような授業展開、授業方法で育んでいるのかをご紹介します。